ある主題書誌の作成：存覚の鹿嶋明神言及を巡って

由　谷　裕　哉
（小松短期大学）

1　問題の所在

本稿は、鎌倉末・南北朝期の浄土真宗僧・存覚（1290–1373）がその著作『諸神本懐集』（1324 年成立）において鹿嶋明神に言及している記述を主題と設定し、それに関連する一次文献（原史料）、および二次文献（研究書）の書誌を作成しようとする試みである。

同テキストは、日本における神仏習合研究の端緒とされる辻善之助の論文「本地垂迹説の起源について」（1907 年、同年の『史学雑誌』に連載）で中世的な神仏習合思潮の代表例の一としてとりあげられていたように、古くから注目されている。

このテキストでは真宗門徒が崇敬すべき「権社」の第一に「鹿嶋大明神」をあげ、武甕槌神とするのが一般的なその祭神を、天神七代の男神・伊弉諾尊とし、伊弉冉であるという香取大明神といわば夫婦神と位置づけている。また、その本地を十一面観音とする。さらに、鹿嶋大明神を春日・住吉・大原野・吉田という四つの京周辺の大明神と同体としているのである。これらの言説のうち、本地十一面説については他書にも見られる主張であるが、祭神を伊弉諾とする比定および他の四明神と同体とする主張、また「権社」の一にあげるのは『諸神本懐集』がオリジナルと思われる。

同書を著した存覚は本願寺三世・覚如（1270–1351）の長男だが、覚如に繰り返し義絶された人物として知られている。南都に法相・華厳を学び、叡山では天台教義を学んだというが、義絶のため本願寺法主にはなれなかった。『諸神本懐集』以外の著作も、『六要鈔』『浄土真要鈔』『存覚上人袖日記』など数多い。

本稿ではこの主題書誌を、言及される知識の広がりを分類する方向で作成したい。すなわち、①言説のテーマ（内容）として神仏習合、②言説スタイル（形式）を制約するものとして真宗史、③言説の作者として存覚に関するもの、④言説の言及対象として鹿島神宮に関するもの、と四分類することにした。そして、これら分類毎に刊行年代順に関連文献を掲げてゆきたいと思う。

なお、問題の『諸神本懐集』を収録した刊本は複数ある。私が底本として利用しているのは、おそらく最も流通していると思われる大隅和雄（編）『中世神道論』（岩波書店、1977 年）所収のものである。その他の刊本については、ここで求める主題書誌と関わらないので省略する。

さらに、鹿島・鹿嶋の表記であるが、本稿では言及する個々の書名・資史料名の表記に従ってその都度使い分けることにしたい。例えば、存覚の言説あるいは延喜式の通称『神名帳』に出る神祇名としては「鹿嶋」、現在の当該神社の呼称としては「鹿島」を使用する。また、個人研究費で納入したものを含み、現在の勤務先である小松短期大学の図書館蔵書である文献については、その旨付記することにした。

2　存覚の鹿嶋明神言及を巡る主題書誌

（1）神仏習合に関する文献

私が既読であったためまず頭に浮かんだのが、下記の村山修一と今堀太逸の著作しかなかったため、真宗研究の側から真宗と神祇とを対比的に検討した研究も一点だけ加えることにした。

なお、宮地直一（1886–1949）や西田長男（1909–1981）らのような代表的な神道学者による膨大

な神道史研究について、公立図書館などでその全てをチェックしたうえで、『諸神本懐集』についての言及を見いだせなかった訳ではない。こうしたいわば正統派の神道史研究における同テキストへの言及については、今後の課題としたく思う。

寺元慧達『神社問題と真宗』顕真学苑出版部、1930 年

本書で「神社問題」と称されているのは、いわゆる国家神道体制の中での真宗門徒の対処を探るという意味合いの課題である。その中で、『諸神本懐集』や存覚が真宗門徒の神祇観として引き合いに出されるということであり、このテキストへの言及と考えればあまりにも羊頭狗肉の議論であろう。

とはいえ、存覚の神祇観を文永・弘安の役以降の「国民的自覚の喚起」と関連づける議論（64 頁）は、傾聴すべきかもしれない。小松短期大学図書館蔵書。

村山修一『本地垂迹』吉川弘文館、1974 年

著者の村山（1914–）は、京都女子大学・大阪女子大学・愛知学院大学の教授を歴任した宗教史学者である。主に修験道や陰陽道の研究で知られ、西田直二郎の流れを汲む文化史的な手法に特徴があると思われる。本書は、村山が『神仏習合思潮』（平楽寺書店、1957 年）や『山伏の歴史』（塙書房、1970 年）のようなよく知られた著書を刊行した後の述作に当たるが、現時点からみると彼にとって比較的初期の単著に当たると思われる。

大陸における本地垂迹説の起源や奈良朝における神仏習合の進展、八幡神などから比較的オーソドックスに本地垂迹関連事象を描出した著作となっている。存覚の『諸神本懐集』については、全体で 18 に分かれるパートの 11、「念仏と神祇信仰」において、その内容が忠実に概略されている。小松短大図書館蔵書。

今堀太逸『神祇信仰の展開と仏教』吉川弘文館、1980 年

著者の今堀（1950–）は現在、佛教大学教授。本書はタイトル通り、神仏習合事象を中世に焦点を置いて考察したもの。

とくに、三部に分かれた第一部で『諸神本懐集』に代表される談義本が検討されている。ただ、著者今堀のオリジナルな考察というより、後述する宮崎圓遵や北西弘のような真宗教団側におけるその研究史を継承した考究と思われる。小松短大図書館蔵書。

（2）真宗史に関する文献

真宗史の中で『諸神本懐集』なるテキストを位置づけた研究と、親鸞以来の本願寺門流の東国での活動を追跡した研究とに分かれるが、全体として数が多くはないので、ここでは細分化せず刊行年代順に概観したい。

なお前者については、西光義遵『諸神本懐集講義及研究』（1935 年）の存在を確認しているが、私が居住する石川県内の公立図書館では現物を見ることができなかったので、以下のリストからは割愛した。

亀川教信『諸神本懐集』小山書店、1930 年

宇野円空編纂による聖典講読全集の第二回配本である。真宗の神祇観念という問題枠組のもとに『諸神本懐集』を講読するもので、参考文献の載るのが利点。小松短大図書館蔵書。

なお、編者の宇野（1885–1949）は、日本における宗教学の開祖的存在であった姉崎正治（1873–1949）の弟子であり、敗戦後は東京大学東洋文化研究所教授を務めた。『宗教民族学』（岡書院、1929 年）や『マライシアに於ける稲米儀礼』（東洋文庫、1944 年）などの著作により、日本における宗教人類学的研究を同門の古野清人（1899–1979）らと開くと共に、浄土真宗の学僧という一面も持っていた。

宮崎圓遵『真宗書誌学の研究』永田文昌堂、1949 年

著者の宮崎（1906–83）は、龍谷大学教授を歴任した真宗史の研究者。現在、思文閣出版か

ら著作集全7巻が刊行されている（一部、品切）。

タイトルにおける「書誌学的研究」は、「書物の成立やその流伝・変遷等を研究する学問」（1頁）を意味すると、明確に定義されている。本書では、親鸞・存覚・蓮如・実悟らの著述動向と、中世における談義本を扱っている。このうち存覚の『諸神本懐集』については、信瑞による談義本『広疑瑞決集』の影響、時衆の神祇思想との関わり、および関東の視点という三点を指摘している。

本書の著作集版（1988年刊）が、小松短大図書館蔵書。もっとも、この著作集版では原本のうち書誌学と無関係であると編者に見なされた論考二編が、一方的に削除されている。

なお宮崎の著作としては、本書より後に出された『初期真宗の研究』（永田文昌堂、1971年）でも、各所で存覚が言及されているが、存覚ないし『諸神本懐集』を専一に扱った章や節はないので、独立した項目としては立てなかった。

笠原一男『親鸞と東国農民』山川出版社、1957年

笠原（1916–）は東大教授を歴任し、主著と考えられる『一向一揆の研究』（山川出版社、1962年）により、一揆研究に一時代を画した歴史学者である。小松短大図書館蔵書。

本書は、それに結実する笠原の真宗教団成立史に関わる考究の一端をまとめたものであるが、タイトル通り東国における親鸞および善鸞が主な課題となっている。したがって、残念ながら覚如・存覚の時代については言及がないし、常陸の鹿島門徒も言及されていない。

北西弘『一向一揆の研究』春秋社、1981年

著者の北西（1925–）は石川県の真宗寺院出身で、大谷大学の学長を歴任した。

メイン主題となる加賀一揆に関しては、大小一揆や天文日記の再評価などを含むものの、一揆衆の意識や宮崎圓遵の上記研究を継承する談義本の分析のように、正統的な一揆研究とは懸隔のある考察が少なくない。そのため、一揆研究史における本書の評価は、必ずしも卓越したものとはされていないと考えられる。

そのうち談義本の考察においては、『諸神本懐集』の底本の可能性をもつ書として、自らが長野県の真宗寺院で発見したという談義本『神本地之事』を紹介し、両者の本文を比較対照している。小松短大図書館蔵書。

内山純子『東国における浄土真宗の展開』東京堂出版、1997年

著者の内山は1933年生まれ。本書刊行当時茨城県在住だったらしく、本書はそうした現地の視点から、常陸国を中心とする親鸞の足跡や、鹿島門徒を含む初期真宗教団について考究がなされている。茨城県を中心に点在するという二十四輩にゆかりの寺院の所在地がリストアップされている（98–114頁）のも、実証史の学術書という装いを持つにしては珍しい。

常陸稲田における親鸞の布教および鹿島門徒については、笠原の上記書と比べてちょうど40年後の刊行でもあり、笠原本とは比較にならないほど細かな情報が載っている。とはいえ、典拠とされたデータの多くは先行する二次文献（研究書や論文）か、一次文献（原史料）であっても『茨城県史料』のような刊本所収のものがほとんどである。したがって、本書を第一級の学術書と見なせるかどうかは、（前述した、伝承の性格が濃い二十四輩寺院をリストアップしている件も含め）やや疑問が残る。

存覚や『諸神本懐集』にはほとんど言及がないが、鹿島門徒については親鸞に帰依した二十四輩の一人でもある順信房信海を、鹿島神宮の神官・中臣信親の子としている。しかし、その史料的根拠は示されていない。小松短大図書館蔵書。

今井雅晴『親鸞と東国門徒』吉川弘文館、1999年

著者の今井（1942–）は現在、筑波大学教

授。主に一遍や時宗の研究者として知られており、『時宗成立史の研究』（吉川弘文館、1981 年）をはじめ、この分野に数多くの著作をもつ。真宗の東国門徒については、長く茨城県在住であることから取り組んだ旨、記されている。

鹿島門徒について、『拾遺古徳伝』の製作を覚如に依頼したと考えられる長井導信をはじめ、順性（茨城県猿島郡の磯部勝願寺第四世）、鹿島順慶（無量寿寺第四世）や成田信性などについて、『存覚上人一期記』やその他の典拠によってその姿を描出しようとしている。上記の内山本とは比べるべくもない、手堅い立論である。

(3) 存覚に関する文献

『諸神本懐集』に関する研究書は前項で触れたので、ここではそれ以外の、存覚のライフヒストリーや著作動向に関する研究に限定したい。なお前者については、存覚の息・綱巌の筆録と推定されるものの、一向一揆時代に加賀江沼郡の光教寺顕誓（1499–1570）によって転写された形でしか残っていない『存覚上人一期記』の史料批判が、一つの課題となるであろう。

顕誓については、その著作『今古独語』や『反故裏書』が『真宗史料集成　第二巻』(同朋舎、1977 年）に収録されており、とくに後者について複数の研究書もあることを付記するに留めておく（北西弘『反古裏考証』真宗大谷派宗務所出版部、1985 年、宮崎清『真宗反故裏書の研究』永田文昌堂、1987 年)。

谷下一夢『存覚一期記の研究並解説』真宗学研究所、1943 年

存覚の息・錦織寺綱巌の筆録と推定される『存覚一期記』の活字化に、研究と解説を加えた書。

著者の谷下（1902–66）は、本願寺派僧侶のかたわら真宗史に取り組んだ研究者で、主著は『増補　真宗史の諸研究』（同朋舎、1977 年、原著 1941 年、小松短大図書館蔵書)。

「研究」のパートは本テキストの成立論などが中心であり、顕誓によって抄出された経緯や諸本の異同を述べ、後世の抄出本であることや書写の際と考えられる誤謬があるものの、存覚の人生について「当時の第一史料」（9 頁）と史的価値を位置づける。「解説」のパートは本文を細分して活字化し、各々の箇所に詳細な解説を加えている。

『存覚一期記』の研究書ならびに刊本として、第一にあげるべき重要資料であろう。古書としては、比較的入手しやすい。

重松明久『覚如』吉川弘文館、1964 年

著者の重松（1919–89）は福井大学・広島大学の教授などを務めた。私は、例えば彼の『中世真宗思想の研究』（吉川弘文館、1973 年）の立論などに対して、必ずしも全幅の信頼を置けないように感じている。とはいえ、本書は吉川弘文館人物叢書の一として存覚の父・覚如について論じたものであるので、全編に渡って穏当な記述である。覚如による存覚の義絶についても考察がある。

ただ同時代史料の不足から致し方なかったのかもしれないが、一部偽書の可能性のある『存覚上人一期記』に基づいて覚如の事績を記述している部分がかなり見られ、いささか時代的制約を感じさせはする。小松短大図書館蔵書。

関山和夫『説教の歴史的研究』法蔵館、1973 年

著者の関山（1929–）は、私が所有する 1981 年刊の本書第 4 刷には、東海学園女子短期大学教授とある。

本書は真宗史を専一に扱った著作ではないが、行論の一部に真宗における説教の歴史や妙好人伝、親鸞絵伝などを論ずる箇所がある。存覚については、真宗史における説教の歴史を考えるうえで彼が重要な足跡を残したことを指摘し、著作の中でとくに『浄土見聞集』に注目している。

『諸神本懐集』については全く言及されない

が、存覚について他書とは異なる位置付けが見られる点で注目される。小松短大図書館蔵書。

宇野圓空（編）『存覚上人』国書刊行会、1976年（再刊）

『真宗聖典講讃全集』全8巻のうち、第7巻『存覚上人之部』を単行本として再刊したもの。(2) の項で触れた亀川教信『諸神本懐集』も含む、存覚の著作の解説と研究を集成している。収録されているのは、他に『六要鈔』『浄土真要鈔』『浄土見聞集』など存覚のほぼ全ての著作である。

古書として比較的入手しやすく、存覚の全体像を理解するうえでも重要な文献と思われる。編者の宇野については、(2) の亀川本を参照されたい。

『存覚上人一期記　存覚上人袖日記』同朋舎、1982年

龍谷大学善本叢書の一で、一次史料。同大学に所蔵されている表題二著作の写本（前者）および原本（後者）につき、写真版と活字化を併せて掲載し、解説を同大の千葉乗隆が執筆している。解説の366頁に、存覚の著作動向を概観する中で『諸神本懐集』も言及されているが、残念ながらその宗教的性格やとくに神祇との関わりについて踏み込んだ分析はない。

なお、解説を執筆している千葉（1921–）は龍谷大学学長を歴任した真宗史学者で、法蔵館より著作集全5巻が刊行されている。

上田さち子『修験と念仏』平凡社、2005年

大阪府立大学教授を歴任した著者（1936–）の、はじめての単著。修験と念仏という観点から、中世民衆の宗教意識に切り込んだ意欲的な研究書である。私は、近刊の『宗教研究』第350号（日本宗教学会）に、本書の書評を寄稿している。

存覚については第X章で、中世的な秘事法門・知識帰命の流れという見通しのもと、関東に支持基盤を持ちやがて大和に展開した系譜、と位置づけられている。前者については、ややステロタイプな評価かもしれない。

(4) 鹿島神宮に関する文献

ここでは、私が比較的容易に入手できたものに限定する。なお、同神社に言及のある『常陸国風土記』関係の文献（研究書を含む）がこの他大量にあるが、存覚の時代と関わらないため全て割愛した。

岡泰雄（編）『鹿島神宮誌』鹿島神宮社務所、1933年

序によると、1929年（昭和4）に昭和天皇が鹿島神宮に行幸したことを記念して刊行された社誌らしい。編者の岡は、刊行時点で前宮司とのことである。

第十二章「神宮関係の寺家」に、中尊の本地を地蔵、脇立を十一面と不空羂索とする記述がある。このうち脇立の本地は、『諸神本懐集』に出る鹿嶋明神および奥の御前のそれと各々対応する。

また、宮司であった中臣親信が親鸞の弟子・順信となったとするが、史料的典拠は提示されていない。この件は、(2) で見た内山純子本でも言及されていたが（なお、中臣信親の子とされていた）、そこでも典拠は示されていなかった。

小池直次郎『鹿嶋史』小池直次郎商店、1935年（再刊）

序によると、本書は1906年（明治39）に出された初版が関東大震災により原版も失われたので、再刊したものとされる。鹿島神宮に対する崇敬の念のもと、一般的な郷土史的記述がなされていると思われるが、神宮寺についても若干の記載がある。

そうした意味では、古書市場でしばしば見受けられる書ではあるが、鹿島神宮の研究史においてそれほど重要とはいえない文献かもしれない。

東実『鹿島神宮』学生社、1973 年

同社の『日本の神社』シリーズの一。著者の東は、刊行当時の同神社宮司であるという。

同シリーズについては、問題とされる神社それぞれの神仏習合時代をほとんど無視しているとの風評もある。本書も、鹿島神宮の祭神とされる武甕槌神を記紀神話の中で位置づけたうえで、鹿島をその神話が展開した地に比定するような立論が、メイン主題の一となっている。神社の歴史に触れる中で社僧に若干言及することがあるが（164 頁）、そうした宗教者が当時の同社祭祀にどう関わったのか具体的な記載はない。

もちろん、学術書ではなくあくまで啓蒙的な装いの文献であるので、この点を非難することは妥当でないかもしれないが、神仏習合時代をなるべく表に出さないようにという志向のもとに著された文献、とはいえるだろう。

式内社研究会（編）『式内社調査報告　第十一巻　東海道 6』皇學館大学出版部、1976 年

同大学出版部の同調査報告シリーズの一。同シリーズでは、言及する神社名を延喜式に出る名称に依拠しているため、本稿で問題とする神社は「鹿嶋神宮」と表記されている。

同神宮については 445–458 頁で詳細に述べられ、末尾に参考文献も付されているので、いわゆる選書ツールとしても役立つ。なお、神宮寺については本尊を釈迦如来、脇立を十一面および弥勒としており（449 頁）、岡泰雄の『鹿島神宮誌』とは異なる。小松短大図書館蔵書。

財団法人神道大系編纂会（編）『神道大系　神社編二十二　香取・鹿嶋』神道大系編纂会、1984 年

同大系の一で、一次史料の集成。鹿嶋分については、後掲する『鹿島神宮文書』に所収の史料が大半を占めるが、その他に『鹿島宮社例伝記』『鹿島神宮伝記』『鹿島神宮記』『鹿島年中行事』『鹿嶋社祭礼記』や、北条時隣撰『鹿嶋志』などを収める。

宮井義雄『歴史の中の鹿島と香取』春秋社、1989 年

著者の宮井は 1910 年生まれの宗教史研究者。複数の大学・短大の教授職を歴任し、『神祇信仰の展開と日本浄土教の基調』全 5 巻（成申書房、1978–80 年）など、浄土教史と神仏習合に関係する多数の著作がある。にも拘わらず、私の真宗史文献の読者経験から判断すると、先行研究として参照されることがきわめて少ないので、孤高の研究者と見るべきかもしれない。

本書は、戦前に出された著者の『鹿島・香取の研究』（山岡書店、1940 年）に改稿を加え、さらに最初と最後の章を加えたものであるとされる。神仏習合時代の鹿島神宮については追加された第五章に出るも、『諸神本懐集』は本地十一面説の一として二箇所で短く言及されるのみである。

鹿島神宮社務所（編）『鹿島神宮文書』続群書類従完成会、1997 年

鹿島神宮所蔵文書の活字化として、1942 年に同神宮社務所の編纂という形で同神宮より刊行された、『鹿島神宮文書　第一輯』のリプリント版である。小松短大図書館蔵書。

収録されている文書は、上述のように『神道大系　神社編二十二』所収のものと一部重複している。現段階で私はほとんどの文書を未検討であるので、本刊本全体の傾向や価値がどうこうということは言えない。

とはいえ、上の『式内社調査報告　第十一巻』458 頁の参考文献表によると、鹿島神宮所蔵ないし関連の一次史料は、他に『続群書類従』所収の文書が若干あるらしいものの、ほぼこの『鹿島神宮文書』と上の『神道大系　神社編第二十二』に網羅されている模様である。したがって、両者を読破することが今後の課題となるであろう。

鹿島神宮社務所（編）『新鹿島神宮誌』鹿島神宮社務所、2004 年（初版 1995 年）

私が最近、鹿島神宮を参拝した際購入した、現在の社誌。2004 年改定に際しての「はしがき」に、北条時隣の『鹿嶋志』や岡泰雄の『鹿島神宮誌』、東実『鹿島神宮』を継承する旨の記がある他、執筆者である矢作幸雄と萩原継男が、それぞれ元禰宜・権禰宜であるとされている。カラー写真が多く掲載されている。

なお 150 頁の年表に、嘉禎 2 年（1236）親鸞聖人が参拝したと明記されているのも興味深い。これは、(2) で見た今井雅晴本によれば近世に成立した伝承のはずである。おそらく、親鸞の参詣という伝承が現代では一種の宗教的権威と考えられ、神社側から史実と認定されたということであろう。

3　今後の課題

以上わずか 23 点の文献ではあるが、設定した主題に関する書誌を作成してみた。

私は図書館情報学の専攻者ではないので、本研究も書誌作成が最終目的ではない。宮崎圓遵の「書誌学的研究」とも少し異なり、存覚のユニークな鹿嶋明神言及という主題の解明があくまで目的となる。

そのためにまず、(1) に関して今回の主題書誌作成に際し留保していた、宮地直一や西田長男その他の正統派的な神道史研究の中で、『諸神本懐集』がどう位置づけられていたかの再検討が求められるであろう。

次に（1）および（2）の談義本の研究から、『諸神本懐集』を類似した談義本と比較して考察する必要性が導かれた。とくに（1）の今堀本、(2) の宮崎本や北西本で言及されていた、『広疑瑞決集』や『神本地之事』との比較対照が必要と考えられる。

また、(2) での北関東における真宗門徒の展開についても、興味が尽きない。存覚の父に当たる覚如の『拾遺古徳伝』も、(『存覚上人一期記』の記述から導かれた推論ではあるが）覚如・存覚父子と鹿島門徒との関わり合いの元で成立したとすれば、その考察も必要となろう。

（3）については、宇野円空の編んだ『存覚上人』のような好著を参照しながら、存覚の他の著作を読んでゆく必要が出てくるであろう。宮崎圓遵や関山和夫が別々の言い方で表現していたように、存覚は浄土真宗の歴史において、親鸞・覚如・蓮如と並ぶ傑出したテキスト作家であったことからも、それは必須であろう。

（4）については、私がまだほとんど目を通していない鹿島神宮に関する一次史料（『神道大系　神社編第二十二』『鹿島神宮文書』）を読破することが必要になるだろう。

以上の課題を検討するに伴い、本稿で設定した主題も、言説を生成した存覚の側に力点を置いて考察すべきなのか、存覚が参照した他の談義本との比較対照に焦点をずらした方が良いのか、あるいは言及されている鹿嶋明神側の文書に通説とは異なる本地説や近畿の二十二社との同体説の根拠となるものが含まれていたのか、明らかになる可能性もあろう。

最後に、このような主題書誌を作成した意義が、存覚の鹿嶋明神言及という言説を探求すべき問題として発見したことにあったことを、再確認したうえで稿を閉じたい。

［追記］

本稿脱稿後、大山公淳『神仏交渉史』（東方出版、1989 年、原著 1944 年）の第 6 章「鎌倉時代神仏道」で、存覚と『諸神本懐集』が言及されていることに気づいた。本稿の分類では、(1) に属する研究書である。しかし、存覚の鹿嶋神宮言及についてはふれられていないので、ここでは付記するに留め、真言宗の学僧であった大山のこの著作の意義については、後考に期したいと思う。

短期大学図書館研究　第 26 号

平成 19 年 3 月 25 日発行

編集・発行　私立短期大学図書館協議会
〒790–8578　愛媛県松山市文京町 4 – 2
松山短期大学図書館内
電話　089–926–7207

発　売　株式会社　紀伊國屋書店
〒163–8636　東京都新宿区新宿 3 – 17 – 7

出版部　（編集）　電話　03 – 5469 – 5919
ホールセール部　（営業）　電話　03 – 5469 – 5918
〒150–8513　東京都渋谷区東 3 – 13 – 11

印刷　協和印刷株式会社

ISSN 0388–3663
定価は外装に表示してあります